



2015年「新・戦争論」で幕開け

今年はベストピアのオンを早めようと思い完成した瞬間にパリの古賀さんから「パリで前代未聞のテロ発生」のメールが入りました。国際的な緊張感が走っている時に相応しくないので急遽変更して拙稿をオンします。

元旦に古賀さんから「パリは快晴、ノートルダム寺院には多くの人が集まっています」と例年の静かなパリの様子を知らされました。1週間も経たないうちに「パリの9・11」が発生、その時、古賀さんは買い物にでかけており事件を友人からのメールで知らされ急いで戻ったそうです。一瞬にしてパリ全体に緊張感が走り、不安を越えて恐怖が市民を襲いました。ここにパリ通信を載せます。



パリで11日、事件の犠牲者を悼み、行進に参加する数十万人の市民＝ロイター



1. シャルリー・エブド社襲撃テロ（パリ通信37号）

例年になく暖かく、穏やかなお正月が開けた1月7日、パリで信じられないテロ事件が起こりました。

カラシニコフ銃で武装、防弾、覆面姿のクアシ兄弟がシャルリー・エブド社に乱入し、12名を射殺、11名の重軽傷者を出しました。標的になったのは、シャルリー・エブドの風刺イラスト画家カビュ、ヴォランスキー、シャルブ、ティニユス、同席していたジャーナリストです。毎週水曜日朝の編集会議を狙った計画テロで、イスラム教の神を侮辱した報復だとし、殺戮を終え、新聞社を出た二人は、駆けつけた警官と銃撃戦を交わし、警官を射殺、逃亡しました。路上での銃撃戦の画像が世界中に流れ、誰もがショックを受け、怒りを覚えずにはいられない惨事となりま

した。事件発生から間もなく、テロ反対のスローガン「Je suis Charlie」が、ツイッター、フェイスブックで流れます。

翌8日朝、パリの南モンロージュで、交通事故の整理をしていた26歳の女性警官がアメデイ・クリバリという別のテロリストに背後から射殺され、こちらも逃走するという事件が起きました。シャルリー・エブド社襲撃と直接の関係はないと思われていました。

翌9日朝、逃亡中のクアシ兄弟は、パリから40km北東の小さな町ダマルタン・アン・ガエルの印刷所に立て籠もります。周囲を完全包囲し、最後の銃撃戦に向けて準備が始まります。

13時、予想外の事態が発生。パリの東ポルト・ド・ヴァンセンヌのユダヤ食品スーパー「カシェール」で武装乱入、人質事件が発生。犯人は、前日モンロージュで女性警官を射殺したクリバリ。クアシ兄弟とクリバリは共犯であったことが判明します。二カ所で同時テロという異例の展開となりました。

17時。同時強行介入。銃撃戦が交わされ、テロリストは3名ともに射殺。強行突破時に人質への被害はありませんでしたが、スーパー占拠時に4名が犠牲になっています。

7日から9日の恐怖の三日間、17名の犠牲者を出すフランス国内で最悪テロ事件となりました。フランスがマリに介入して以来、フランスはテロのターゲットになっています。内務大臣ベルナール・カザヌーブは、2013年夏以降、未然に防いだ重大なテロ計画が5件、ジアデイスト勧誘サイト摘発が約200件、テロのあり方も大きく変化していると言います。クアシ兄弟、クリバリはパリで生まれたフランス国籍です。フランス社会で落ちこぼれ、刑務所で誤った信仰に染まり、格安航空券を使ってシリア、イラク、イエメンで兵器訓練を受けています。

2012年3月、トゥールーズでユダヤ人学校の生徒3名を含む、7名の犠牲者を出したモハメッド・メラのテロから少しの時間しか経っていません。テロの脅威は常に存在します。

フランスは、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教が共存する国です。過激派とは何ら関係のないイスラム教フランス人は、非常に居心地の悪い思いを強いられています。フランスの長い歴史を見ると、シャルルマーニュ、聖ルイ王を始め、キリスト教徒を守るのがフランス王の義務でした。政教分離の共和制になり、様々な人種、価値観、思想、信仰を持った人たちが住むフランスで、多様性を尊重しつつ、平和共存をしていくことの難しさを感じます。

11日日曜日、レピュブリック広場からテロ反対行進が行なわれます。1944年8月パリ解放行進と同じ規模になると予想されています。フランス共和制の土台である

「自由」を守るという意味で、同じ重要性を持ちます。今回のテロ事件は、表現の自由だけでなく、フランス社会の様々な問題を提起しています。しかし、「Je suis

Charlie」を掲げ、フランス国民が一同に行進する姿は、一大事が生じたときのフランスの団結力、動員の強さの表れです。被害者の死を無駄にしない社会に変わることを期待したいと思います。（古賀順子記）

2. 「新・戦争論」を学ぶ

共時性というか私の感性が年末に選んだ本が「新・戦争論」（僕らのインテリジェンスの磨き方）佐藤 優・池上 彰対談）と「東京ブラックアウト」でした。前者については池上さんが4日のテレビで親切に解説してくれました。

「この世紀をどう読み解くか」もっとも近い2015年をどう読み解くかを訴えています。

「世界は一瞬にして平和な地から修羅場になってしまうのだ、ということを、私たちは警戒しておく必要があります」（p6）

「過去の栄光よ、もう一度」ということが無いように「通時性においては、歴史を知り、共時性においては、国際情勢を知ること。知識において代理経験をして、嫌な時代には嫌なことがたくさんある、ということを知っておくこと」の大切さを訴える佐藤 優さんは「21世紀の戦争においては、個別的自衛権、集団的自衛権を区別して対応するのは、そもそも無理」「脅威の対象となるのは―――」と言われる。

その矢先のできごとである。テロ行為はいつも残酷で犠牲は悲惨です。その為、復讐が再生されます。パリでは多くの市民が、テロ行為の恐怖を越えて、自由を守るために、フランスでは370万人の人がデモに参加しています。パリではテレビの報道にあるように160万人の参加によってフランスが大切にしているものを訴えています。行進には欧州や中東・アフリカなど50カ国・地域、国際機構の首脳が参加しました。特筆すべきはイスラエルのネタニヤフ首相とパレスチナ自治政府アッバス議長が腕を組んで隊列に加わっていることです。どんな宗教・民族・イデオロギー等の対立があっても、地球規模の危機に直面したときは人間は協力できるものという希望が与えられました。色んな論議がなされていくでしょうし、なされるべきであると考えますが、私はイスラエル・パレスチナの平和が原点だと思います。

収束が見えない点で、この新しい戦争は日本の福島原発と類似します。フクシマの反省がないままに再稼働に路線が敷かれているようです。政治には利害関係のある強力な後ろ盾があることを「東京ブラックアウト」（若杉 洸著・講談社刊）が雄弁に語っています。この小説は「原発ホワイトアウト」に続くもので、新潟の原発が大雪の日にテロリストによって爆破される―「原発再稼働が殺すのは大都市の住民だ」―の予言が現実となり京都への遷都となる。その費用19兆円の捻出の仕方

もシュミレーションされているという。そして二つ目の原発事故が起きても再稼働に向かう日本の姿が経済的側面と精神的側面の双方から浮き彫りにされています。経済的格差の広がりには政治権力と密接に結びついています。政治家とそれを動かす官僚の中に日本の平和を願う心、地球を守る心が芽生えることをひたすら願うのみです。

暗い2015年のスタートです。にもかかわらず希望が持てるのは前回の総選挙で日本の平和を願う人が15%いることがハッキリしたことです。これらの人が党利党略ではなく純粋な心で、これから生きていかねばならない若い人のために、何かを遺し、何か礎をつくらねばならないのです。石末